

## 帯の建築

—連なる分岐形態によるアートコンプレックスの設計—

渡会 実穂



### 制作データ

作品総数 全体模型1/100 分岐パターン模型1/200 敷  
地模型1/800 パネルA1×6 敷  
制作日数 構想4カ月 制作1カ月  
費用 4万円  
制作環境 Windows Vista、VectorWorks12



**設計概要** 河川、葉脈、道路網…分岐は、自然界や社会の多くのものにみられる形態である。自然界に多くみられる分岐形態を建築に応用し、都市におけるアートコンプレックスを提案する。新宿御苑の北側。ここは新宿御苑の豊かな緑と、高層ビル群の境界面である。この境界面は道路と歩道があるだけだ。

ここに帯を並べる。この帯は分岐しながら空間を包みこみ、さらにこれらは絡み合う。美術展示を主とした複合施設となる。

新宿駅に向かって歩く。左側に新しく建物が建つみたい。花屋さんの花が見える、カフェも入ってるんだ。ちょっと寄ってみようかな？変わった彫刻がある。ここは美術館なの？でもどこからかピアノの音が聞こえる。見上げたらおもしろそうな作品がちらっとだけ見える！あのエレベーターで上がってみようかな。あ、さっきの作品とは違うみたい。いろいろな部屋があるんだ。向こうで演奏会やってて、その下の部屋にさっきの作品が見える！向こうにも行ってみたい。

ここでちょっと休憩してから帰ろうかな！

**制作テーマについて** 美しく合理的な形態を持つ自然界の構造体をヒントに、合理的で美しい建築を設計したいと考えた。自然界の構造体の中でも、樹木、葉脈、アリの巣、亀裂、道路網…と、自然と社会の技術のあらゆる分野に登場する“分岐”という形態に興味をもった。同じシステムがあらゆる場面で見られることから、そこに構造的・システムの合理性が潜んでいるのではないかと考えた。

### 推薦のこぼし 石川 孝重

日本女子大学家政学部住居学科教授

「帯の建築」は、分岐形態を主軸にした設計である。多くの卒業設計が用途や個人のもつ問題意識から始まるのに対し、形態操作から設計が始まっている点が特徴的だ。

渡会さんは4年生として研究室にきたときから自然界と構造との関係に興味をもち、前期では集合住宅の課題で、大きなツリーハウスのような自然界の直接表現に取り組んだ。この設計を通し

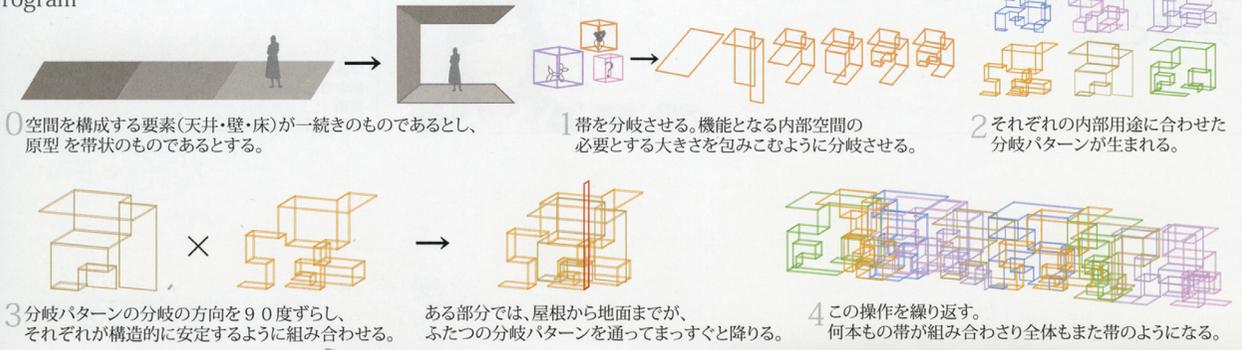
て、分岐の応用により、“木の下のような空間ができ、GLは半屋外的な空間になる”ことや、“徐々に大きさの小さくなっていく空間が連なっている”ことに気づき、この特徴をさらに追求するようになった。抽象化をさらに進め、建築の原型を帯状の板とした頃からは、自然界のなかでも幾何学の形態操作へと移行した。

形態操作だけでなく、人が使う建築の空間として工夫がある点にも注目したい。まず、大空間を上にもっていくことで、下の空間は必要最低限だけを取り、あえて小さくすることで、カフェの席

やお店の一部が表出するきっかけになる。半屋外的な空間がこれらの表出によってGLに賑わいを与える。また壁が交差し、1つの空間であったものに死界を生むことで、無理なくバックヤードが作り出される。

完成した建築は、反対側の空が抜けて見えたり、ある部屋からは遠くの他の空間が見えるなど、視線が透過する距離がさまざま存在する。このような透け感のある建築は、敷地と定めた新宿御苑の緑と都会の境界面をうまくつむぐことになる。

Program



Site

